

『真の神を信じるとは ～ルツの信仰姿勢に学ぶ～』

●本日の聖書箇所 ・ルツ記 1:1～2:3, 11 (新改訳第3版)

1:1 さばきつかさが治めていたころ、この地にききんがあった。それで、ユダのベツレヘムの人が妻とふたりの息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。1:2 その人の名はエリメレク。妻の名はナオミ。ふたりの息子の名はマフロンとキルヨン。彼らはユダのベツレヘムの出のエフラテ人であった。彼らがモアブの野へ行き、そこにとどまっているとき、1:3 ナオミの夫エリメレクは死に、彼女とふたりの息子があとに残された。1:4 ふたりの息子はモアブの女を妻に迎えた。ひとりの名はオルパで、もうひとりの名はルツであった。こうして、彼らは約十年の間、そこに住んでいた。1:5 しかし、マフロンとキルヨンのふたりもまた死んだ。こうしてナオミはふたりの子どもと夫に先立たれてしまった。1:6 そこで、彼女は嫁たちと連れ立って、モアブの野から帰ろうとした。モアブの野でナオミは、【主】がご自分の民を顧みて彼らにパンを下さったと聞いたからである。1:7 そこで、彼女はふたりの嫁といっしょに、今まで住んでいた所を出て、ユダの地へ戻るため帰途についた。1:8 そのうちに、ナオミはふたりの嫁に、「あなたがたは、それぞれ自分の母の家へ帰りなさい。あなたがたが、なくなった者たちと私にしてくれたように、【主】があなたがたに恵みを賜り、1:9 あなたがたが、それぞれ夫の家で平和な暮らしができるように【主】がしてくださいますように」と言った。そしてふたりに口づけしたので、彼女たちは声をあげて泣いた。1:10 ふたりはナオミに言った。「いいえ。私たちは、あなたの民のところへあなたといっしょに帰ります。」1:11 しかしナオミは言った。「帰りなさい。娘たち。なぜ私といっしょに行こうとするのですか。あなたがたの夫になるような息子たちが、まだ、私のお腹にいてもいいのですか。1:12 帰りなさい。娘たち。さあ、行きなさい。私は年をとって、もう夫は持てません。たとい私が、自分には望みがあると思って、今晚でも夫を持ち、息子たちを産んだとしても、1:13 それだから、あなたがたは息子たちの成人するまで待とうというのですか。だから、あなたがたは夫を持たないままにいるというのですか。娘たち。それはいけません。私をひどく苦しませるだけです。【主】の御手が私に下ったのですから。」

1:14 彼女たちはまた声をあげて泣き、オルパはしゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツは彼女にすがりついていた。1:15 ナオミは言った。「ご覧なさい。あなたの弟嫁は、自分の民とその神のところへ帰って行きました。あなたも弟嫁にならって帰りなさい。」1:16 ルツは言った。「あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」1:17 あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があるあなたから離れるようなことがあったら、【主】が幾重にも私を罰してくださるように。」1:18 ナオミは、ルツが自分といっしょに行こうと堅く決心しているのを見ると、もうそれ以上は何も言わなかった。

1:19 それから、ふたりは旅をして、ベツレヘムに着いた。彼女たちがベツレヘムに着くと、町中がふたりのことで騒ぎ出し、女たちは、「まあ。ナオミではありませんか」と言った。1:20 ナオミは彼女たちに言った。「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私をひどい苦しみに会わせたのですから。1:21 私は満ち足りて出て行きましたが、【主】は私を素手で帰されました。なぜ私をナオミと呼ぶのですか。【主】は私を卑しくし、全能者が私をつらいめに会わせられましたのに。」1:22 こうして、ナオミは、嫁のモアブの女ルツといっしょに、モアブの野から帰って来て、大麦の刈り入れの始まったころ、ベツレヘムに着いた。2:1 ナオミには、夫の親戚で、エリメレクの一族に属するひとりの有力者がいた。その人の名はボアズであった。2:2 モアブの女ルツはナオミに言った。「どうぞ、畑に行かせてください。私に親切にしてくださる方のあとについて落ち穂を拾い集めたいのです。」すると、ナオミは彼女に、「娘よ。行っておいで」と言った。2:3 ルツは出かけて行って、刈る人たちのあとについて、畑で落ち穂を拾い集めたが、それは、はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑のうちであった。

…2:11 ボアズは答えて言った。「あなたの夫がなくなってから、あなたがしゅうとめにしたこと、それにあなたの父母や生まれた国を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私はすっかり話を聞いています。」

●はじめに/ルツ記について

ルツ記の時代背景は、モーセ・ヨシュアとサムエル・ダビデといった偉大な指導者の中間にあたり、信仰的には暗黒の時代と言われている。

そのような混迷する時代にあって、心温まる1人の女性の歴史が聖書に記されている。当時の時代背景にあって、異国の女性がイスラエルの歴史の中で主人公して記されるのは、特例中の特例である。

そして、その後もダビデ、そして主イエスの家系にまで、わざわざルツの名が記されているのは、たとえ、女性であったとしても、異国人であったとしても、つまり、誰であっても、真の神、主を信じ、その戒めに生きる者は、神の祝福にあずかり、神の民の一員となれる事を示している。

●本日の説教のポイント

【1】真の神を信じる者は、「_____」を大切にする。(1:16)

当時、女性には働き場所がほとんどなかった。その為、夫、息子等に先立たれ、男手のいない家庭というのは、社会的な死を意味した。また、イスラエルでは、もともとは信仰を確立する事が目的ではあったが、純血が大切にされ、異国人が生活するのは相当な困難が予想された。

そのような事から、ナオミはルツ達が自分から離れて、母国であるモアブにとどまるようにすすめた。二人の嫁はナオミから愛情を注がれてきたのであろう、又、年老いた母一人では、生き抜く事は困難であると知っていたためか、二人はなかなか離れようとしなかった。最終的に、ルツだけがナオミとついていく事になる。ルツの告白は、どのような困難があろうとも、ナオミが信じてきた真の神を、自分の神として信じ従い続けていくという信仰告白である。それと同時にルツの告白は、ナオミに対する献身と、ナオミの民を自分の民とするという告白がセットとなって告白されている。又、ボアズの言葉(2:11)からも、ルツがいかに姑ナオミを大切にしてきたかが分かる。

真の神を信じる者は、自らの家族を自分自身のように大切にし、また、同じ神を信じる者を自らの友、家族とする事を決心するのである。

私達も真に神を信じる者として、家族や教会の仲間を大切にしよう。

【2】真の神を信じ、家族を大切にする者を神は「_____」いて下さる(2:3)

当時のイスラエルにおいて、社会的弱者が糧を得るために、裕福な者の畑で、落穂をひろう事は認められていた。そして、ルツもそれにならって今日の糧を得るために、落穂ひろいにでかけた。

落穂ひろいに行くのに、預言者の言葉があったわけでも、御使があわわれた訳でもなく、当時の習慣にのっとって、単に糧を得る為に出かけただけであった。しかし、ルツの出かけた畑は、やがてルツの夫となるボアズの畑であった。そして、そのボアズとのルツこそは、やがてダビデ、そして主イエス様の家系を生み出す者となるのである。

イスラエルの歴史において大きな影響力をもたらすような人物(アブラハム、ダビデ...)には、いわゆる特別な召命(神かの直接の語りかけ等)があった。それに対して、ルツにはそのような特別なものは何もなかった。しかし、聖書はそのような偉大な人物と肩を並べる存在として、ルツの名を記している。

たとえ、何か特別な選びや、体験がなかったとしても、真の神を信じ、家族や信仰の仲間を大切に生きて生きる者の事を、神は大切に覚えていて下さり、思いがけない恵みを用意して下さる。

●教えられた事、決心した事
